

スーパー読者の
経営力が選ぶ

あの商品この技術 26

自ら設立の中心人物として代表取締役を務めてきた(株)昔がえりの会の社長をこのほど退任。「商品」としての製品の出荷品質にこだわり、「顧客本位」をテーマとして会を指導してきた金井氏。その機械選びにも、精神が息づいている。



息子さんの洋之さんも経営に参加している。しかも土地はいくらでもある。これからの同家の発展が楽しみだ。

埼玉県上里町
フレッシュファーム金井

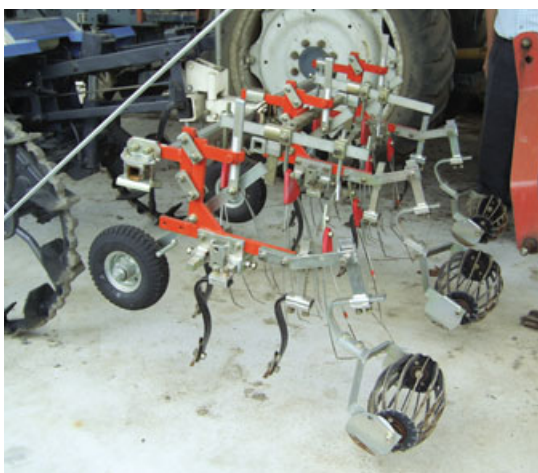
金井 明 氏

【経営データ】

■個人データ／1949年生まれ。労働力は金井氏のほか、奥さんの真知子さんと長男の洋之さん夫妻、そして常時3~5人程度のパートさんを雇用している。

■経営概要／作目はミズナとエダマメ。ミズナは通年のハウス（8千平米）と約1haの露地。エダマメは6月から8月中旬までの2.5ha。 ※■の数字は資料請求番号です

長ネギの掘取用に開発された光洋エンジニアリングのリフタをエダマメの掘取りに使用している①。



農業、除草剤の使用を最小限にしている昔がえりの会の精神からも、畑作用中耕除草機へはかねて注目してきた。本誌で紹介されたキューホー製作所の魔法のカルチ②もエダマメ栽培にいち早く導入し、その除草効果だけでなく中耕の意義にも注目している。土質にも合うことから、仲間内で5台が使われている。



洗浄後すぐに予冷され袋詰め。同社のエダマメには沖縄の塩がセットされている。



選別作業は脱穀機につながる機械選別機に加えて人手による選別が欠かせない。さらに洗濯機と脱水機を使って洗浄。



エダマメの脱穀機とその選別ライン(③ミツフ)。朝5時半から8時まで収穫をして、朝食後8時半から脱穀・選別作業が始まる。

野菜類に関しては、関東地区のスーパーに直接出荷するほか、東京青果の個性化商品コーナーに出している。現在の昔がえりの会の売上は約

設中である。

野山類に関しては、関東地区のスーパーに直接出荷するほか、東京青果の個性化商品コーナーに出している。現在の昔がえりの会の売上は約

指すことを求めている。

同社では、各種の野菜やコメの他、自らの生産物を原料として、焼き菓子やドラ焼きのような加工品の生産販売も始めた。まだ委託加工の形であるが、関東道の上里サービスエリアでの販売のほか、いくつかの店舗に出荷を始め、現在、自社工場を建設中である。

金井明氏（57歳）は、設立以来7年間務めてきた(株)関東地区昔がえりの会の代表取締役を先ごろ退任した。平成11年7月に金井氏を中心に設立された同社は、埼玉県下の7名の農家で組織された農産物出荷団体である。現在は、約50名の生産者が参加している。参加会員に対しては、土作りにこだわることで、農薬使用を減らすための耕種的防除や初期・早期防除の徹底などの科学的な防除法に取り組むことで、農薬使用の削減や消費者本位で健全な農業経営を目指すことを求めている。



ハウスの散水装置はエルメコの頭上灌水装置 65 (丸山製作所)。水はハウスの横まで定置配管されている。



ミスナの播種は、クボタ (総和工業株) の歩行型シーダーマルチ 64。畝立て、点播、穴開きマルチ (幅95cm、4穴) 被覆、鎮圧を一工程で処理する。



人件費だけでなく、ロールのフィルムを蒸着するこの包装機の導入で、50万袋出荷すれば、フィルム代だけで50万円はコストが下がる。以前は一袋つつ手作業でやっていたが、約280万円の野菜包装機の導入で4人プラス名位の人区で1分で25袋、1日当り3千から4千箱の出荷が可能になった。メーカーは日本ポリスター 65。



トラクタは、クボタの69馬力と43馬力。かつては牛蒡リフタ (スガノ) など使ったが、現在の作業機類では馬力も余り気味。



手引きのライムソーワ。ホームセンターで買ってきたものに増枠をして容量を増やしていた。これで、鶏糞肥料も撒くという。



収穫されたミスナは、その場で手際よく根を処理され、土汚れをまとうことなくカゴに詰められていく。現場であらかじめ清潔な状態にしておくことで、包装作業の省力化を図っている。



3億8千万円。

そんな昔がえりの会をリードする金井氏の作物は、ミスナとエダマメ。ミスナは8千平米のハウスで通年栽培するほか、9月から12月までの出荷時期には路地 (約1ha) でも栽培する。エダマメは6月から8月上旬まで、山形の産地の出荷前を狙った茶豆系で、面積は2・5ha。

昔がえりの会の会員参加要件にありとおり、金井氏の「商品」としての出荷物に対する規準はあくまで顧客本位。厳しい品質管理を生産者自らに要求する。

作物の品質は当然のこと、朝取り出荷、予冷による品質の安定化。少ない労力で出荷品質を上げるための作業手順などにも工夫を重ねている。

新技術の導入にも意欲的だ。本誌で紹介された、北海道型のカルチベータ (キューホー製作所) やエダマメ収穫に使用される長ネグリフタ (広洋エンジニアリング) などは、同地の土質にもぴったり合い、とても具合良く使っているという。

常時5〜6人いる雇用を安定させるために、通年栽培を心がけてきたが、子息の経営参加に加え、もう一人くらいの管理職員が採用できるなら、広がる耕作放棄の畑を活かしての次の展開も考えたいと話していた。

(昆吉則)